

歌壇 俳壇



＜日曜日のブローチ 02＞ junaida

小林 貴子 選

焦がすなは独り言なり目刺焼く
（和歌山県由良町） 藤田 昌幸
母国捨つる人のゐる星鳥帰る
（石川県能登町） 瀧上 裕幸
反骨の一茶が師匠日かな春
（八尾市） 宮川 一樹
マタニティーマーク目映き春息吹
（東京都大田区） 黒崎 康夫
押さぬため持つ核ボタン 四月馬鹿
（草津市） あびこたろう
☆偶数は奇数のとなり春の雨
（藤井寺市） 横内 正人
何秒か余白してまた囁れり
（横浜市） 小林 瑞枝
青き踏むベンチャーズなど聴きながら
（宝塚市） 三宅あきら
耕は牛の歩みの耕松機
（東かがわ市） 桑島 正樹
私は私達か昭和の日
（名取市） 里村 直
共に居て心通わぬ春炬燵
（さいたま市） 笹川たか子

うたをよむ 吟行のたのしみ

田丸 千種

まさなる空より枝垂桜かな
桜の季節、必ず口をついて出るのは高
浜虚子の弟子、富安風生のこの句だ。昭
和十二年、千葉県市川市の弘法寺での
「武蔵野探勝」にて作られた。
「武蔵野探勝」とは、武蔵野を中心に
毎月場所を変え、各地を吟行して句会を
行うという企画で、昭和五年から十四年
まで百回にわたって開催された。メンバ
ーは虚子を中心とした二十名から四十名
ほど。水原秋桜子、高野素十、中村草田

男ら鈴々たる俳人が吟行記事を書き、月
刊の俳句誌「ホトトギス」に掲載された。
これを集めて刊行された虚子編「武蔵
野探勝」は、今読んでも躍動が伝わる。
野火ゆきき萱倒れゆくあはれかな
虚子の娘である星野立子の作品。「浮
間ヶ原」で一行は、何と戯れにマッチを
擦って草を焼いている。（昭和六年の話
です。真似しないでください！）
川を見るバナ、の皮は手より落つ
「川蒸気」に乗って隅田川を遊覧した
吟行派を駆り立てる。

日の虚子の句。十一月に熱帯季題が使わ
れているのも自由な昇揚の表れか。
「武蔵野探勝」で描かれているのは、
「討入の義士の様に」季題を見出さん
と、生き生きと野外へ繰り出す探勝俳人
たちだ。解放感あり、好奇心あり。未知
なるわが句との出会いを求めて、師弟と
もども、時間の許す限り、貪欲に句作に
励む。百回分の吟行の面白さが理屈抜き
で迫ってくる。次も虚子句
春水に舟あり乗って腰かけぬ
こんな文字通りの向日性が、時代や風
物の違いを越え、二十一世紀の今も我ら
吟行派を駆り立てる。
（俳人）

◆「大串章選」は選者が体調不良のため休みます。

「朝日歌壇2024」「朝日俳壇2024」 昨年の「朝日歌壇」「朝日俳壇」の掲載作品をまとめたシリーズ最新版。「歌壇」は各選者の年間秀歌10選・朝日歌壇賞と総評、「俳壇」は各選者の年間秀句10選・朝日俳壇賞と総評を掲載。ASA（朝日新聞販売所）を通じても購入できます。（朝日新聞出版・各3080円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。

春闘やしようか家事のストライキ

（日光市） 土屋 恵子

【評】二句目二人で台所にいるのではなく、自分に言い聞かせる。一人でも目は美味しい。二句目、多くの場合、好きで捨てるのではない。苦しい。三句目、反骨精神を大切にしたい。四句目、生まれてくる命がききとまぶしい。

長谷川 權 選

をしみなく木の芽の如くとめどなく

（川越市） 岡部 申之

猫駆けてサザエさん通り全て春

（福岡市） 釋 鯛硯

猫の子のひとり遊びや腹の上

（横浜市） 瀬古 修治

大宇宙唯一の命春の地球

（新宮市） 中西 洋

月よりも地球腕と「きぼ」より

（八王子市） 額田 浩文

花冷えや本屋の消えた文化都市

（三郷市） 木村 義熙

花冷えのゼレンスキーの強さこそ

（尼崎市） 田中 節夫

もう誰も驚雷に振り向かず

（香川県琴平町） 三宅久美子

死の話してゐる花の虚子忌かな

（徳島県松茂町） 奥村 里

うららかや水面を泳ぐ錦鯉

（京都府与謝野町） 植田 宗一

熱熱の目刺骨と頭

（和歌山県日高町） 市ノ瀬翔子

チューリップだけが花よと手入れる

（厚木市） 飯塚 智明

【評】一席。たとえば春、たとえば愛。惜しみなくとめどなきものよ。二席。お魚くわえたドラ猫。漫画の世界はのどか。三席。こちらは子猫。腹の上とは布袋様のような。十二句目。チューリップが大好き。ほんとに春らしい花。

高山れおな 選

亀よ亀こがロゴスだこで鳴け

（大阪市） 上西左大信

花吹雪、リスン、リスン、聞いてよ、聞いて

（東京都練馬区） 吉竹 純

春泥の道を兵士は今もなほ

（札幌市） 伊藤 哲

雨だれは春の足音百万石

（宝塚市） 大曲富士夫

☆偶数は奇数のとなり春の雨

（藤井寺市） 横内 正人

春の泥よりこの国の生まれけり

（日立市） 川越 文鳥

氣に入りし愚作の季語はいつも春

（東松島市） 高橋きみゑ

児らみんな可愛い仏甘茶仏

（福岡県鞍手町） 松野 賢珠

一斉に芽吹き走るや沢つたひ

（東京都大島町） 大村 森美

花衣疵の織りたる袖かな

（藤沢市） 中川 節子

造園のユンボくるくる初蝶来

（西東京市） 今井 名津

鳥雲り椅子になりたい木に座り

（神奈川県大磯町） 前田 恵美

【評】上西さん。ロゴス言葉。「こがロゴスだ」は言葉の中だけで鳴く亀への奇妙な呼びかけ。吉竹さん。状況は様々に想像可。リフレインの軽快さよ！伊藤さん。過去から現在へと続く泥塗れの行軍。時事句にして象徴詩。